

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業  
領域開拓プログラム（研究テーマ公募型研究テーマ）  
評価用研究成果報告書

課題		規範理論と経験分析の対話			
研究テーマ名		規範理論としての法語用論の開拓—ヘイト・スピーチの無効化をめぐる—			
研究代表者	所属機関	国立大学法人 北海道大学			
	部局	大学院法学研究科			
	役職	教授	氏名	尾崎 一郎	
委託研究費		単位：千円			
平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度		
3,857	3,391	2,748	1,741		

### 1. 研究の概要

研究目的、研究内容、成果や波及効果等、実施した研究の概要について、簡潔に記述してください。

本研究は、いわゆるヘイト・スピーチの言語学的分析を通じて、その法規制の是非をめぐる規範理論と経験分析の有機的な架橋を行う。ヘイト・スピーチをめぐるのは発話者の表現の自由とマイノリティの人権とのどちらを優先するのかという調停しがたい理論上の対立があり、「規範理論と経験分析の対話」が極めて困難であることを象徴的に示している。そこで、言語学の最新の知見を取り入れながら、ヘイト・スピーチとして企図された言動がいかなる言語行為として、いかなるコンテキストで、誰により誰に対してどのように発話され応答されているか、そこではどのようなコミュニケーションが生まれ変容しているかを、詳細に分析することでその言語的特質を明らかにし、<意図された害悪としての認知+法による抑制+抑制の結果としての加害欲望の増幅>という組み合わせの再生産というパラドキシカルな悪循環から社会が脱却し、ヘイト・スピーチなる言説の危害性を社会的に緩和、無効化する方途を探求する。すなわち、表現の自由とマイノリティの人権との対立という膠着した構図を脱却する、第3の可能性が切り開かれる。

これらの目的を実現するために平成26年度から28年度にかけて、インターネットの匿名掲示板上で繰り返されてきたヘイト・スピーチを幅広く収集し、コーパス（大規模言語データベース）を構築した。実務上の動きに応じて情報の質と量が大きく変動したため計画より時間を要したが27年度末に収集を終了し、28年度にデータ・クリーニングを行った。これと並行して、社会心理学分野で開発された「先制攻撃ゲーム」実験が、ヘイト・スピーチの無効化と深く関わっているという知見を得たため、28年1月に北海道大学社会科学実験センターのラボを用いて、学生を対象とした同実験を実施した。こうして得られた大量のデータの分析を28年度後半から行った。また、27年度末（28年2月）に米国（ハワイ）とベルギー（ブリュッセル/アントワープ）を訪問し海外調査を行った。これらにより、執拗にヘイト発話を繰り返す少数の確信犯と無数の便乗犯の意識的・自覚的な相互作用が、ターゲットとなるマイノリティ自身の反応や実態と無関係に自己増幅的にヘイト・スピーチを産出しているという構造が具体的に明らかになり、被害者への加害行為への介入・規制とはまた別の視点が必要なことがわかってきた。中間報告として28年11月の中日社会学会（北京市）と12月の法言語学会（名古屋市）において共同研究報告を行った。